

冒険学校は「学校」か？（前編）

近代学校の浸透と冒険学校の非学校性

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

はじめに

コロナ禍において「自粛要請」という言葉が話題になった。「自粛」という自発的な行為を「要請」という矛盾から、マスメディアやSNSではしばしば批判的に取り上げられたことを覚えている人も多いのではないだろうか。

この言葉ほどではないものの、「冒険学校」という事業名もまた、どこか歪な響きを孕んでいる。「冒険」という非日常体験を掲げながら、「学校」というある種の日常性・閉鎖性を想起する名を冠しているからだ。ところが、「冒険学校」と調べると、INCHに限らず多くの実践がヒットする。「冒険」というのは、「学校」で学ぶようなものではなく、むしろその対極に位置するようなことではないのか？

そもそも、私たちがとりくんでいるのは「学校」なのか——この問いは、私が学部生のころ、同じく「ちえのわ農学校」という名を冠した活動を展開する、サークルちえのわ部員だった頃から存在している。そこには、「学校でできないことをできる」という側面を重視する立場と、内容は学校教育と異なるという前提を共有しつつも、より学校的な組織化・制度化を進めた方が子どもにとって充実した体験を提供できるとする立場とで、活動をめぐる葛藤（ときに衝突を含む）があったのである。

ちえのわ農学校がどうあるべきか、という問題は現役の学生に任せるとして、今回は、冒険学校が「学校」という名を冠していることについて考えていきたい。

（なお、ここで想定しているのは私が関わったここ10年ほどの冒険学校と現代社会の情勢であり、それ以前については考慮に入れていないことを断っておく）

前編である今回は、冒険学校の実践における学校的な要素を考えるとところから出発して、近代教育における学校とはいかなるものかという教育学的な視点から——なるべく難しい話は避け、手短かに——、「学校」という名前に浸透する「学校」の自明性を論じよう。

そして次号の後編では、近代的な学校とは異なる意味において、「冒険学校」という歪な事業名の射程を見出してみたい。

1. 冒険学校の非学校性

一般的な教育系NPOに比べ、自然文化誌研究会の冒険学校が少なからず「非学校的」であることは、ナマステ読者にとっては言うまでもないことだろう。

プログラムに時間は決まっておらず、参加は自由。食事や起床も自由である。「スタッフ」は、あくまで「助言者」として活動することが推奨される。また、「スタッフ」の一部は普段は本物の学校教員だが、彼/彼女らもまた、職場とは異なるかたちで子どもと対峙している。

わたしが知るここ数年間の冒険学校で学校的な要素だと思えるのは、子どもミーティングで参加者に感想を求めるシーンや、夏に行っている修了証の授与くらいのものである。だが、それさえさほど学校的ではない。

修了証は通常の学校でのいわゆる「修了」——所定の課程を収めたという意味で、一定の水準を超えた証——というよりも、参加賞的な位置付けであるし、子どもミーティングでの発言も、学校のように評価に関わるわけでもなく、強制されるものではない（少なくとも私はそう思う）。

だからこそ、奇妙なのである。なぜ、「冒険村」ではなく「冒険学校」なのか？

（そもそも「冒険学校」のくせに、顔役は「校長」ではなく「村長」だ）

なぜ、冒険学校は、そのプログラムや理念において「非学校的」な要素を持ち、またそれを独自性としているにもかかわらず、なお「学校」と名乗っているのだろうか？



図 1 文字だけだとさびしいので、冒険学校の非学校的なところの象徴みたいな図。いいよねこの写真。

2. 近代教育としての「学校」概念の浸透

INCHIにおける直接の経緯はさておき、教育学的な視点から見ると、その答えは単純である。それは、私たち現代人が「教育の場」をイメージするとき、当たり前のように用いてしまう言葉こそ、「学校」だからに他ならない。

このように述べると、近年、塾をはじめ、NPOや公共の施設、あるいは企業における生涯学習の取り組みなど、学校以外に多くのオルタナティブな教育/学習の場が展開されていることから、教育/学習=学校というイメージは古い、という反論があるかもしれない。

しかし、教育学的に言えば、それはむしろ逆である。

私たちがイメージする「みんなが行く学校」というのは、実は極めて最近登場したものだ。それは、西洋における市民革命のもと国民国家が誕生し、自由と平等を理念とする人権を支えるものとして、公教育制度が整えられたことで初めて成立した。教育の歴史全体から見れば、本来、「学校」以外の学びや教えの場の方が、よほど普通なのである。

オルタナティブな学びの場が「学校と異なる教育/学習の空間」として認識・評価されることは、むしろ「学校教育」が私たちにとっていかに当たり前のものとして浸透しているかを、浮き彫りにしているのだ。

このことはINCHIを含め多くのオルタナティブな教育/学習の場が、「学校」という名前を冠している理由とも関係している。野外活動に限定したとしても、「学校」ないし「教室」という名前を冠した事業を展開するNPO法人は多い(試しに、NPO キャンプ 学校とでも調べてみてほしい)。それらは、制度的にもそして事業内容的にも、必ずしも学校的であるとは限らないに関わらず、「学校」という名前を当たり前のように名乗っている。それほどまでに学校という概念は、近代以降、「教育/学習の場」を指す普遍的な言葉として浸透しているのである。

そのような自明性を孕んだものとして捉えてみると、いかに非学校的に——あえて言えば「冒険的」に——見えたとしても、「冒険学校」にもまた、「学校的なもの」が深く浸透していることが見えてくる。

例えば、保護者-子ども-スタッフの関係、基本的なジェンダー概念、保健や食事をはじめ分掌化された組織体制など、実は、冒険学校は多くの部分で学校的な構造を持っている。こうした制度的な側面だけでなく、いくら「助言者」として定位しているとはいえ、冒険学校における私たちの行動には、知らず知らずのうちに、学校的な振る舞いが浸透している。

こうした冒険学校の「学校性」は、いわば、「冒険の学校」としての側面ということができるだろう。他方で、活動内容や体制に非学校的な要素を多分にはらみながらも、冒険学校が「学校」という名を冠していることは、「冒険の学校」というストレートな意味とは異なる、ある種の発想の転換を含んでいるように思われる。

(次号へ続く)